

ABIC 国際社会貢献センター Information Letter

No.32 2011年11月

政府機関関連への協力	JICA専門家 パキスタン政府投資庁（BOI）投資環境整備アドバイザーの活動…………… 2
自治体・中小企業支援	やまなし産業支援機構主催 「海外経済情報・アジア市場開拓実務セミナー&相談会」でタイについて講義……………3
プロジェクトの受託	文化庁日本語教育事業の「茨城県定住外国人日本語伸長教室」の開設…………… 4
教育	多摩大学「通訳入門」講義の報告・感想…………… 6 立命館アジア太平洋大学（APU）の夏季集中講義…………… 7 ABIC/日本貿易会・関西学院大学との共催プロジェクト 第5回高校生国際交流の集い…………… 7 高大連携講座003…………… 8
留学生支援	東京国際交流館での活動 秋の入館者歓迎パーティーとバザー……………9 国際交流フェスティバル……………9
私のボランティア活動	ABIC日本語教師養成講座について…………… 10 NGOグリーンクロスジャパンでの活動…………… 11
新刊紹介	『もっと美味しいコーヒーが飲める 4ステップ』 —手づくりコーヒー、家庭焙煎コーヒーの楽しみ—…………… 5
	会員入会のお願い…………… 12 法人・個人正会員/活動会員一覧…………… 12 関西デスクの移転…………… 12 ABICホームページ リニューアルのお知らせ…………… 3

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター（ABIC）
Action for a Better International Community

<http://www.abic.or.jp>

〒105-6106 東京都港区浜松町2-4-1
世界貿易センタービル6階（社）日本貿易会内
Tel：03-3435-5973 Fax：03-3435-5979
e-mail：mail@abic.or.jp

【関西デスク】
〒541-0053 大阪市中央区本町4-4-24 住友生命本町第2ビル9階
Tel & Fax：06-6226-7955
e-mail：kansai-desk@abic.or.jp

政府機関関連

JICA専門家 パキスタン政府投資庁（BOI） 投資環境整備アドバイザーの活動

JICA 長期専門家 パキスタン投資環境整備アドバイザー **ながせ まさお** **長瀬 正男** (元 豊田通商)

2010年5月、JICA専門家（投資環境整備アドバイザー）としてパキスタン政府投資庁（BOI：所在地 首都イスラマバード）に赴任した。

自身のミッションを通じて海外投資誘致活動展開、更には中長期展望から国際競争力ある産業基盤への転換、究極的には経済基盤強化に貢献出来ればと願いながら、以下の業務内容を展開している。

- ①投資関連法規制度分析と改善提案、その実現への指導
- ②投資環境インフラ現状分析と改善提案、その実現への指導
- ③上記に必要な投資庁組織分析とパワーアップ指導
- ④新規海外投資誘致活動展開の指導

パキстанは現役時代初めての駐在地である。今回35年振りに戻り、感慨深いものがあるが、当国も緊張する中東情勢の中でアフガニスタン、インド、イラン、中国を睨み地政学的にも重要な立ち位置にあることを改めて認識している。加えて去年、今年の大洪水による経済的ダメージも大きく、政治面ではテロとの戦い、ビンラディン殺害事件など現在も厳しい時代が続いている。しかし、他方では日本の2倍の国土、国力の基礎たる人口1億7千万人、将来有望視される豊富な鉱産物資源などは将来への希望であり、まさにアフター BRICSの次を担うN11の一翼であるパキстанを長い目で応援したい。

私も20年以上の各国経験から効率的な業務推進のため、JICA支援を受けて4名現地スタッフを雇い、BOI内部から意識改革、人材育成を含めて全てを“目に見える化”で展開、同時に私の経験とノウハウを見せながら、常にあるべき将来の方向性を提示しながら指導に努めている。

法規関連整備では、より魅力的な投資恩典制度の提案、



現地スタッフ4名と — JICA EXPERT TEAM FOR BOI EMPOWERMENT PROJECTと名称、組織体としてBOI支援

より透明性の高い企業会計制度への改善提案などを実現すべく投資庁と共に政府関係各省との交渉展開をしている。インフラ整備・改善では、道路アクセス・電力事情改善のためには同様に関係各省と交渉、必要予算確保のため、じっくりと時間をかけ粘り強く説得をせねばならず重要な業務となっている。

また出来るだけ投資企業の現場に出向き、彼らの抱える問題点、課題、悩みを現場で肌で感じながら、傾聴、分析、現場の声を反映し、業務達成に役立てるように努めている。各社も厳しい経済環境の下、いかに生産性向上、経営効率向上を図るかで日々注力されており、私も現場で気づく改善点、経営指導も行い、強いては投資拡大、あるいは次の投資決定に少しでもお役に立てればと願っている。

徐々にではあるが、BOI含め政府内官僚も意識も変わりつつあり、自助努力で投資環境改善の行動を起こしてくれているのは嬉しい限りである。



BOI内長瀬プレゼン（日系メーカー含め投資環境分析と改善提案）— 重要なプレゼンは関係省庁トップを招き定期的に全体会議で実施



BOI/JICA調印式現地報道記事（カラチ産業団地環境改善支援の基礎調査）— 自身の業務成果を反映し、JICA支援決定

自治体・中小企業支援

やまなし産業支援機構主催「海外経済情報・アジア市場 開拓実務セミナー&相談会」でタイについて講義

もりた ひとみ
森田 仁美 (元 フジクラ)

10月4日(火) 13:00~17:40、公益財団法人やまなし産業支援機構主催山梨県内の中小企業を対象とした「海外経済情報・アジア市場開拓実務セミナー&相談会(タイ王国)」の講師として派遣された。

会場は甲府市郊外の笛吹川堤防に近い大津公園そばのアイメッセ山梨ビル4階。当初の開催日は9月21日であったが、台風10号の影響で10月4日に延期となり、当日は晴天に恵まれ、受講者31名、相談会への出席会社は3社であった。

セミナーでは、まず過去10年における日本と中国+アセアン諸国のGDPおよび人口の推移の資料をベースに、東南アジア地区への投資の有利性を説明した後、本題に入り、タイ王国の紹介と経済状況、投資傾向、投資政策(特に進出地区による優位性の説明)、タイ王国への投資の有利性、投資機会のある産業(自動車部品製造業、電気・電子部品製造業、産業機械・農業機械製造)、タイ王国への投資の心構え、ならびにタイ王国経済投資委員会(BOI)のサービス活動を紹介した。

相談会には電子部品製造業、自動車部品製造業、産業廃棄物処理業とそれぞれ特長のある企業が参加した。3社とも内容の濃い相談で時間が不足気味となり、更なる疑問、質問事項はメールで対応することになった。しかし、現在の段階ではまず現地へ数多く足を運び知見を増やすことをお願いした。

現在、タイ王国はアピシット政権からインラック政権に替わり、労働者への最低賃金を一律300バーツ/日に引き上げることを政策として取り上げているが、会社経営にはこれが大きな負担になることを経営者側は憂慮している。



写真1枚掲載 セミナーで講義する森田会員

一方、タイ政府は自動車産業に向けて「東洋のデトロイト」とスローガンを掲げており、これを受けて自動車製造会社の進出が増え続けているのが現状である。これに伴いその裾野産業(第二次、第三次産業)の不足は深刻な問題となっている。

一方、日本における中小企業のビジネス展開は近年ますます厳しくなっている状況から、海外展開を真剣に考えている企業は15年前に事業の海外展開を検討していた企業に比べ受講態度に大きな開きを感じた。特に山梨県では東京エレクトロン社山梨事業所の東北地区移転に伴う雇用者減がおよそ5,000人近くに及ぶということで、一層逼迫した雰囲気であった。しかし、公益財団法人やまなし産業支援機構のような公的機関がこのようなセミナーを主催し、地域県民への事業展開のヒントを主導することは非常に意義のある事業と考える。

ABICホームページ リニューアルのお知らせ

この度、ホームページを全面リニューアルいたしました。今回のリニューアルでは、全体のデザインを変更し、見やすく、必要な情報を探しやすいページ作りを心がけ、ご利用いただく皆様にとって使いやすいホームページとなるように改善いたしました。今後とも、ABICの情報源としてご愛読いただければ幸いです。

プロジェクトの受託

文化庁日本語教育事業の 「茨城県定住外国人日本語伸長教室」の開設

もり かずしげ
森 和重 (中南米担当コーディネーター、元 三井物産)

2011年度文化庁の「生活者としての外国人」のための日本語教育事業「日本語教室の設置運営」に応募した結果、4月に「茨城県ブラジル人等定住外国人児童日本語伸長教室」の認可を受け、6月から11月にかけて実施している。

本事業実施の背景としては、既に本紙でも紹介しているが、リーマン・ショック後、親の失業などの結果、急増した不就学・不登校子女の救済のため、日本政府（文科省）が2009年度から3年間の緊急支援プロジェクト（予算37億円）として、これら子どもたちが日本の公立学校へ円滑に転入できるように日本語教育を中心とした「虹の架け橋教室」委託事業を公募した。

ABICもこれに応募し、2009年9月に認可を受け、茨城県常総市・つくば市でブラジル人学校と提携し、2教室を運営しており、既に数名の生徒を公立学校に送り出すなど成果を上げている。

しかし、本プロジェクトが本年12月で終了するため、本事業の重要性を鑑み、政府に対し予算継続の要請をしているが、3.11の大震災の膨大な復興予算の影響で継続は難しい見通しである。

リーマン・ショックと3.11東日本大震災の影響で、2008年初頭には32万人に達した在日ブラジル人も現在22万人に減少したと言われているが、定住化が進んでいる状況は変わらない。「虹の架け橋教室」を通して見えてきたことは、学齢期にある子どもたち（約2.5万人）が数年後には日本社会に参入するのは間違いなく、十分な教育と社会適応性を持たない人材の参入は地域社会にとり将来大きな社会リスクになることは予見できる。

不就学・不登校の子どもたちの救済を目指す「虹の架け

橋教室」に対応する日本語教育充実と社会適応教育機会の拡充により、心身共に健全な青少年を育て社会に送り出すことが地域社会にとり重要な課題であり、地方行政・地域社会・地域ブラジル人社会などと一体となり、多文化共有・共生の一環として協働して取り組む必要がある。

具体的に挙げれば、①日本語教育の充実、②社会適応と進学指導、③職業教育（職育）、④学童健康診断、⑤母語教育対策などである。これらの事業については、既に地域の行政・地域社会と取り組みを始めている。その中の日本語教育の充実の一環として、文化庁の「生活者としての外国人」のための日本語教育事業を取り上げたものである。

「茨城県ブラジル人等定住外国人児童日本語伸長教室」事業：

1. 茨城県のブラジル人の登録者数：

茨城県の調査によれば、ブラジル人の登録者数は、1990年1,600人（県同全体12,300人）が、2006年には11,000人（同53,000人）と約7倍に急増し、その後2009年10,200人（同56,300人）と同水準を維持していたが、3.11後には地震・放射能への恐怖心から1割以上が減少していると推定されている。そのほとんどが県東南部の常総市、土浦市、神栖市、筑西市、下妻市周辺に住んでいる。義務教育年齢児童数は、約1,000人前後（10%）と推定され、1/3公立学校、1/3がブラジル人学校（常総市2校、つくば市1校）に通学、1/3が不就学・不登校と言われている。

従って「虹の架け橋教室」もブラジル人の集住する常総市と下妻市（その後つくば市に移転）のブラジル人学校との連携により開設したものである。



下妻教室



常総教室

2. 日本語教育強化の重要性：

日本で定住外国人の子どもたちが社会的に独立して生きていくための基盤として、日本語の習得は重要な要素である。茨城県内での官民による日本語指導活動は少なくないが、より高度な日本語学習を進めるには制約がある。例えば、上級校を目指すための公立学校への進学や転入・専門的な職業教育を目指すとか日本社会でより高度な生活を目指し日本語能力や生活力を高めたいと希望する子どもたちの期待に応える拠点として「日本語伸長教室」を設置した。

設置場所は、「虹の架け橋教室」のある常総市内の茨城県就労・就学センター内を借用し、NPOコモンズと協働し、虹の教室の日本語教師を指導者の中心として開設した。今後、有能なボランティア、日本語指導員、ブラジル人学校、ブラジル人コミュニティ、地域NPO、地域商工会、市役所、市教育委員会・公立学校、県庁などの支援を受けて、本教

室の充実と定着を図るべく取り組んでいる。これをモデルとして、日本語教室の充実と継続を図り、将来的には拠点となる教室を増やしていきたい。

3. 「日本語伸長教室の概要」：

初年度の課題としては、講座のカリキュラムの設定と指導内容の充実および地域連携の確立であった。現在の生徒数は14名で能力別にA・Bの2教室に分けて2名の教師により毎週水曜日午後2時間授業で12月まで継続予定である。

その他の懸案プロジェクトについても既に茨城県国際課、常総市・つくば市の市役所、教育委員会、商工会、医師会、筑波大学、NPO・ボランティア団体などの協働体制もできつつあり、徐々に実現化の方向に進むことを期待している。

新刊紹介

『もっと美味しいコーヒーが飲める4ステップ』 —手づくりコーヒー、家庭焙煎コーヒーの楽しみ—

著者：田中 昭彦 たなか あきひこ

(ブラジル政府公認コーヒー品質格付士、ABIC 会員、元三井物産)

発行所：株式会社旭屋出版

定 価：1,500 円+税 2011 年 6 月発売 D5 版 120 ページ

過去40~50年来、我が国の高度経済成長、急速な食生活の西欧化に伴い日本コーヒー市場は急拡大し、現在、米国、ブラジル、ドイツに次ぐ世界第4位のコーヒー消費国にまで成長しました。

コンビニ、スーパー、百貨店、自動販売機喫茶店、ファストフード店には多種多様のコーヒー製品が溢れ、今やコーヒーは人々の日常生活に欠かせない嗜好飲料品となっています。

こういった環境下、コーヒー愛好家の中には、“もっと美味しいコーヒーが飲みたい”と願っている人達が多くいるものと思われます。こういった人達へのアドバイスとして本著を書きました。少しの手間を掛けるだけで、安値で美味しい手造りコーヒーを楽しめる方法を書きました。

人は、美味しいコーヒーを飲むと幸せな気分になります。貴方の日常趣味の中に、もう一つ「手造りコーヒー」の楽しみを加えて見ませんか？それが家族との絆を一層深め、さらには交友の輪が広がる事に繋がれば望外の幸せです。

古来、火を使っての物造りは人類だけに与えられた能力です。多くの人々が、コーヒー豆の焙煎に魅了される原点はこの辺にあるものと思われます。

(注) 著者の田中氏は、ABICの人材紹介で2000年10月に国際協力NGOピースウィンズ・ジャパンの非常勤アドバイザーとして東チモール・コーヒー生豆輸入の対日輸出の可能性につき現地調査され、輸入実務からマーケティングまで種々アドバイスをされました。



教育

多摩大学「通訳入門」講義の報告・感想

かわもと やすひろ
川本 康博 (元丸紅)

2009年4月末にABICから、多摩大学グローバルスタディーズ学部（以下SGS）で開講する「通訳入門」の担当非常勤講師応募の打診があった。私はたまたまその数年前から文化面を含む幅広い分野に通じた英語を身につけ直そうと、多くの時間を英語の勉強に充てていた。また浅いながら日本の文化・歴史等も勉強していた。そんな折の話なので即刻応募し、ABICから適宜助言を頂戴して書類を整えた後、SGS松林学部長の面接を経て、ABIC会員の加藤保弥氏（元住友商事）と共に非常勤講師に任用された。

加藤さんと私は早速、SGS2009年度秋学期の「通訳入門」講座30コマを夫々15コマずつ分担することになった（2010年度から年間60コマに倍増）。加藤さんの各種通訳理論・実践講座に加えて、私の講座は「ワークショップ日本」と名付け、日本文化の通訳能力を備えたグローバル人材を目指す「実践トレーニングの場」と位置付けた。

外国人との交流においては、相手と自分双方の人格・文化をお互いにきちんと理解・尊重し合うことは肝要であり、そのための英語コミュニケーション能力と教養が要求される。即ち、それらの能力の基礎部分を養うための訓練を、本講座で行おうとの狙いである。

カリキュラムは、主題の日本文化を14のテーマに分けて組み、教材は日本文化の基礎知識習得と英文音読に用いる指定教科書と共に私の手作りハンドアウト（HO）を使用する。HOはテーマ毎に外国人が疑問に思うことや興味を持ちそうな事柄（例えば、「何故日本人は家に上る時靴を脱ぐのか？」等々）を毎回10問程度のQ&A（英文の質問と解答例）に纏め、各授業の1週間前に学生にメールで配布する。



多摩大学SGSはこじんまりしたキャンパスで、すれ違おうと学生がニコニコ挨拶してくれるようなアットホームな雰囲気のある学校である。受講者数は学期で異なるが10～20名規模であり、教室は賑やかで明るい。授業が始まると、学生はまず趣味など軽い話題の1分英語スピーチをした後、講師の私も参加するペアワーク（PW）とグループワーク（GW）に臨む。

学生はHOの10問の中から予め選択した2問の解答について、PWとGWで披露する。この解答に対して相方や他メンバーがその場での思いつきを英語で質問し、それに対して更に返答する、という具合に対話を発展させていく。これは予期せぬ様々な質問にも瞬時に対応するための訓練だが、途中で雑談などに脱線することがあるものの結構盛り上がる。

期末試験では、学生全員に5分程度の英語のプレゼンを課す。プレゼンターは原稿を手を持たず、聴衆に向かってアイコンタクトを絶やさずに語り掛けることを求められる。学生は皆しっかり準備をするので、実際のプレゼンが内容がユニークで、工夫を凝らしたものが多い。プレゼンを終えた学生の多くが達成感にも似た満足そうな表情を浮かべるのが印象的である。

下の写真は2枚とも期末終了後に学生が自発的に撮影してくれたもの（左は2010年8月、右は2011年8月）で、どちらも笑顔が多く見られる。

学生は皆真面目に授業に取り組んでくれて、口々に「楽しい授業だった」「英語を沢山話せてよかった」「日本人ながら日本の文化を英語で話す難しさを感じた」等々、色々な感想を話してくれた。私も彼らの生の反応を目にして遣り甲斐を感じつつ、授業の更なる改善に努めている。

最後に、斯様にエキサイティングな機会を与えていただいたABICの皆さまに心から感謝申し上げます。



教育

立命館アジア太平洋大学 (APU) の夏季集中講義

3月11日の東日本大震災の影響で、企業各社が2012年度新卒者の採用を数ヶ月後倒した兼合いで、学生側も就活(就職活動)が後にずれることとなったため、授業受講や単位取得に影響が出る懸念が強くなり、立命館アジア太平洋大学 (APU) は急遽夏季集中特別講義を実施することとなった。

同学の要請を受け、ABICは以下の3科目合計45コマ (3コマ/日×5日間) の講義を8月8日～12日に実施した。

- ①「自動車産業論」(英語 95分/コマ×15コマ 2単位)
- ②「観光ビジネス論」(日本語 コマ数は同じ 2単位)
- ③「企業におけるICT利活用とビジネス革命」
(日本語 コマ数は同じ 2単位)

いずれも1時限、2時限、昼食を挟んで3時限の毎日3コマ連続5日間という講師、学生共にタフな授業となったが、3科目合計約300人もの受講者が集まった。

もし単位不足があれば就職は決まっても卒業できない事態もあり得るとい背景はあるものの、大学側が希望する「4年生向けのより実社会に近い講義内容」と、暑い盛りだけに学生の集中力を切らさない討論・対話等を多くした「双方向型授業」を取り入れたため、学生、大学双方からますますのご好評を頂いた。

同学とは開学以来、長年の好関係を続けてきており、今後ともさらに密接な関係を維持していきたい。

(立命館アジア太平洋大学担当コーディネーター
もり かずしげ たにがわ たつお おんだ ひではる
森 和重、谷川 達夫、恩田 英治)

教育

ABIC/日本貿易会・関西学院大学との共催プロジェクト

国際社会貢献センター (ABIC) と日本貿易会はグローバル人材育成への貢献活動として毎年夏に関西学院大学や青山学院大学 (今年は中止) と産学共催のプロジェクトを行っている。

第5回高校生国際交流の集い

(7月22日～23日)

公益財団法人AFS日本協会および日本国際交流振興会の協力、米国総領事館 (大阪・神戸) の後援により、第5回高大連携プログラム“高校生国際交流の集い”を開催した。

このプログラムは関西学院の大学生をリーダーとして、日本の高校生と諸外国の短期留学高校生が寝食をともにし、レクレーションやグループ討議・発表を通して交流を行う機会を提供するもの。

2011年は東日本大震災の影響で留学生の参加が危ぶまれたが、関係者のご尽力で留学生の参加は2010年より少なくなったものの開催の運びとなった。

会場は関西学院大学上ヶ原キャンパスで、今年は「つながり」を大テーマに、「Now or Never 今、私たちにできること」をスローガンとして開催した。

参加した高校生は兵庫県立宝塚西高等学校、兵庫県立国際高等学校、大阪府立箕面高等学校、大阪府立千里高等学校、啓明学院高等学校、関西学院高等部から計28人、AFS、JFIEの協力により米国、ブルガリア、イタリア、カナダ、オーストラリアから計12人、関西学院の大学生19人が参加した。



参加者



山本関学副学長による開会挨拶

初日午前は関学生チーフリーダーの京橋さんの司会の下、山本昭二関西学院大学副学長による開会挨拶、ルース・M・グルーベル関西学院長、米国領事館の米国人インターンのダニエル・デュラン氏による日本語を交えた講演などがあり、その後、高校生・留学生はボランティア大学生より説明を受けた後、昼食後のドッジボール大会で直ぐに打ち解けあい、日本人・留学生混合のグループに分かれ、各大学生リーダーの指導の下「つながり」を大テーマとして各グループでのディスカッションを開始した。

2日目午前は引き続き各グループによるディスカッショ



グループディスカッション

ン、間に大学茶道部によるお茶会を挟み、各グループが寸劇を取り入れるなどユニークな発表を行った。AFSの大西加奈子審査委員長によるユーモアを交えた楽しい英語による講評後、1位・2位・努力賞(3位・4位・5位)を発表、表彰状と記念品および全員に修了証を授与し、伊地知ABIC事務局長の挨拶で閉会となった。

閉会後も名残惜しく、皆連絡先を交換し合い再会を誓っていたが、大学生リーダーがプログラムを無事遂行できたことに感極まって涙を流す場面もあり、若い人達に感動を与えることができた大変有意義なプログラムとなった。



表彰式 伊地知ABIC事務局長から表彰状と記念品を授与される受賞グループ

高大連携講座003 (8月4日～9日)

本講座は関西学院大学の正式な単位履修講座として、2006年より開催されている。事情により中断した年もあったが、履修している大学生が高校生を指導しながら講義と一緒に聴講し、テーマを決めて研究発表を行い、その内容につき討議を重ねるといって全国でも稀な講義となっている。

従来はアメリカ理解教育ということで、北米を中心とした講義内容となっていたが、2011年はアジアにも目を向け、日本・北米・アジア(主に中国とインド)の関係につき企業経営・政治経済・社会文化という多面的な側面から考察を行うという内容になった。

座長は商学部の藤沢武史教授であるが、大学生は文学・法・商・総合政策・人間福祉など学部を超えた履修者が集まり、高校生も関西学院高等部のみならず、兵庫・大阪の公立高校ならびに私立高校の生徒も出席し、高校の授業では味わえないアカデミックなテーマでの講義受講や研究・討論を行うという貴重な経験を提供することができた。

なお、ABICの会員であり駐インド大使などを歴任された平林博氏に「日米中印間の外交力学」という政治面での講義を行っていただいたが、大学生・高校生より好評を博し、この講義に触発されて研究発表では日印外交をテーマに取り上げたグループがあったことを申し添える。

(関西デスクコーディネーター たぢばなひろし おおにしとしお 橘 弘志、大西 稔男)



講義する平林会員



研究発表会

留学生支援

東京国際交流館での活動

秋の入館者歓迎パーティーとバザー

10月15日（土）、ABICの留学生支援の拠点であるお台場の東京国際交流館では、秋季入館の留学生や家族を迎えて、恒例の秋のウエルカムパーティーが開催された。



ディナーパーティー



在館生によるライブ

例年、中庭のステージではダンス、音楽、民族舞踊、空手などのパフォーマンスが披露され、各国留学生お国自慢のエスニック手料理の屋台が立ち並び、庭の半ばがABIC主催のバザー提供品で埋まるといふ、にぎやかな野外パーティーとなると、今年はいよいよ雨と強風に見舞われたため、野外ステージ



バザー

でのパフォーマンスと屋台は中止となり、使える限りの部屋一面に提供品を敷き詰めたABICバザーが唯一のイベントとなり、バザーにはABICのコーディネーターのほか、日本語広場の講師やボランティアチームメンバーも参加して留学生や家族と交流を深めた。

夜は、カンツォーネや沖縄民謡の弾き語りなどを聞きながらのディナーパーティーが行われた。

バザーにはABIC支援企業やその社員、日本貿易会職員、ABIC会員の方々から350箱を超える提供品をご寄贈いただき、売上は17万円を超えた。これは従来通り交流館留学生や家族支援に充てられる。ご提供いただいた皆様に心から感謝申し上げます。

国際交流フェスティバル

11月3日（木）の文化の日は、東京国際交流館において、各国の民族舞踏や音楽の演奏、伝統文化の体験、科学実験への挑戦、小動物とのふれあいなど盛りだくさんの催しが行われた。幸い当日は潮風と陽射しが心地よく、中庭広場ではデッキ・チェアとテーブルで家族揃ってエスニック料理を味わう場面があちこちに見受けられた。

ABICは日本の伝統文化に親しんでもらうため、書道、華道、茶道の体験教室を開いた。この教室は毎月ご指導いただいている講師の方々、ABICのボランティアおよび留学生の皆さんの協力を得て実現できた。体験教室の参加者は、書道153名、茶道114名、華道74名、総数341名となり、ここ数年では最高の参加者数となった。



書道体験教室



茶道体験教室



華道体験教室

(留学生支援担当コーディネーター 田中 武夫、たなか たけお 鍛形 勲 くわがた いきお)

私の
ボランティア活動

ABIC 日本語教師養成講座について

日本語教師養成講座講師 すずき まつこ 鈴木 松子

日本語教師養成講座が始まったのは今から5年前で、この9月で第1期以降の講座修了者は110名を超えました。私は2年前、先代の先生がご逝去されて、第7期の講座から講師を引き受けて2年が過ぎ、この10月で、第11期を迎えています。現在の受講者は7名で、実践に重きをおいて講義を行っています。

私は40歳で主婦の傍ら、大学に入り大学院（修士・博士課程）へ。その後、大学で2年間非常勤講師を務めた後、51歳で単身アメリカへ留学しました。MBA修了後、交渉学を学び、大学で講師を務める傍ら、今なお学研の途にあります。

40歳からの大学での勉強は下りのエスカレーターを駆け上るようなものでしたし、留学においては、これが血のにじむ思いかという感がありました。いずれにしてもあらゆることに素直に取り組むことで克服したと思っています。そして私の理念は「巾のある柳のようにたおやかな弾力的な思考と堅固な基礎の確立」です。

そういうことから、講座の最初に受講者の皆さんに必ず申しあげることがあります。「これまでの経験・知識・教養は一旦机の引き出しにしまって、異物を飲み込むべく胸襟を開いて下さい。新しいことを学ぶには、素直であること。これは学ぶことの第一条件です。教えることにも素直さが大切です。白いキャンバスにきれいな絵を描いていただきたい。」

また、「教授する」ということでは、専門の指導は勿論ですが、もっと大切なことは学ぶことに対する意識の改革のお手伝いをすることです。そのために、人数



の多少、年齢、男女に関係なく対峙している人に向き合うか、という考えから、本講座でもそのことをお伝えしています。

日本語教師は、講じるのではなく、学習者のコミュニケーションの手助けをすることを目的として、一人ひとりにきちんと対峙した授業をすることが大事だと考えます。このことから、実践に重きを置き、教えることの基本を身につけてもらいます。基礎を徹底的に身につけるため、初級レベルの人を対象とした模擬練習(トライアル)をしながら、基礎の確立を目的としています。最終的には、各人(程度の差はあれ)が滑走路で離陸の準備が出来ている状態になっています。

私の授業法には賛否両論あるとは思いますが、講座修了後、半数以上の方が日本語教師として多方面で活躍していらっしゃいます。最初は自己啓発のために参加された方も、後半は早く日本語を教える場に立ちたいという想いが強くなり、その活動をされます。即、日本語教師をしなくても、講座を修了したことをきっかけに、新たな挑戦事項を探すという方もいらっしゃいます。



組織に文化が根付くように、クラス毎に独自の文化が形成されます。新しい期を迎えるたびに、緊張と期待に胸を膨らませながら、受講者の皆さん一人ひとりと真剣に対峙し、楽しい時間を過ごさせて頂いていることに心より感謝しています。

私の ボランティア活動

NGO グリーンクロスジャパンでの活動

かわもと つねひこ
川本 恒彦 (元 三菱商事)

1998年に商社から環境NGOの仕事に転身して以来、私の社会的活動は三つの非営利活動を中心になされてきました。本業となった国際環境NGOグリーンクロスジャパン (GCJ) に於ける地球環境保全の活動、何年前から参加していたABICでの各種の出前授業や講義、そしてKINDと名付けられた駒場の留学生寮にいる留学生たちとの交流活動です。

GCJは1993年に元ソ連大統領ゴルバチョフ氏の提唱により創設された環境NGOグリーンクロスインターナショナルの日本支部として誕生し、様々な環境保全活動を行ってきました。国際団体なので国際会議も多く、世界各国から集まった人々と活発な議論をするのも醍醐味の一つではありますが、やはり楽しいのは現場です。

国内においては小学生への環境教育を推進すべく「みどりの小道」環境日記プログラムを推進していますが、全国で元気に環境活動を行っている子供たちに会うと日本の未来に希望が持てます。

途上国を中心とした海外事業は3~5年の期間で計画され、これまでも西アフリカのブルキナファソでの植林や井戸建設事業、比国レイテ島での井戸建設など様々なプロジェクトに取り組んできました。元商社マンの強みからかどこに行っても病気にもならず、すぐに現地の村人と仲良くなり、水道も電気も無いような所でも結構楽しく仕事をやらせてもらいました。困った事と言えばブル

キナファソで村人からお土産に生きたニワトリをいただいたことでしょうか。帰りの車の中で「コケッコー」とうるさく鳴いて閉口しました。もちろん現地のグリーンクロスの人にあげてきましたが。

2005年にはスマトラ沖地震の津波に襲われたスリランカに赴き、被災地を含め農村や山岳地帯を視察し、グリーンクロススリランカの創設とともに被災地モルツワ市の小学校での図書室の建設と環境日記プログラムの導入を行いました。現地ニーズの把握やプロジェクト策定には商社時代の感覚が大いに役立つ

ち、しっかりとした持続可能な計画を遂行することができていますが、一番に大切なことはビジネスと同じで信頼のできるパートナーを見つけることだと実感しています。

スリランカの環境日記プログラムは今年で7年目を迎えました。毎年12月に東京ビッグサイトで開催される環境日記コンテスト表彰式には、優れた日記を書いたスリランカの小学生数人が招待され、日本の小学生との意見交換や交流を図っています。そしてここで活躍するのがスリランカから来ている留学生です。KINDの活動を通じて仲間となった留学生にお願いして、通訳や子供たちのお世話を毎年お願いしているのですが、時には子供たちにスリランカ・カレーの差し入れを持ってきてくれるなど、まるで自分たちの弟や妹のように世話をしてくれます。

本年10月26日にはグリーンクロスオーストラリアの協力を得て南相馬市の八沢小学校で豪州のブリスベン、ニュージーランドのクライストチャーチの小学校をインターネットで結び、ライブ映像で三国の小学生による災害と環境についての国際子供会議を行いました。最後は三本締めを三国全員で行い、児童たちは国際交流の楽しさに触れたようです。年齢や階層、国を超えた様々な人との絆の構築こそがグローバルな問題の解決への近道でありましょう。これからもABICやGCJ、KINDを通じて生まれた人々との交流を大切に、三つの活動に積極的に参加して行きたいと思っています。



ブルキナファソの子供たちと



スリランカと日本の小学生が環境の勉強



ゴルバチョフ創設会長との幹部会議



南相馬市立八沢小学校での
ライブ映像による国際子供会議

会員入会のご案内

国際社会貢献センター（ABIC）の活動にご賛同頂き、会員として資金的援助をしていただける個人の方や企業、団体のご入会をお願い申し上げます。

種類	内容	年会費
正会員	センターの活動を推進する個人、法人及び団体。 (理事会の承認を得て入会)	法人及び団体 一口 50,000円
		個人 一口 10,000円
賛助会員	センターの趣旨に賛同し、会費を納める個人、法人及び団体。	法人及び団体 一口 10,000円
		個人 一口 5,000円
活動会員	センターに登録し、センターの事業に参加しようとする個人。	不要 — —

正会員

団体・法人 (17社) 〈社名五十音順〉 〈10口〉 (社) 日本貿易会 伊藤忠商事(株) 住友商事(株) 双日(株) 豊田通商(株) 丸紅(株) 三井物産(株) 三菱商事(株) 〈4口〉 (株) 日立ハイテクノロジーズ 〈2口〉 稲畑産業(株) 岩谷産業(株) 長瀬産業(株) 阪和興業(株) 〈1口〉 協同木材貿易(株) 興和(株) JFE商事ホールディングス(株) 蝶理(株)

個人 (9名) 〈入会順・敬称略〉 池上 久雄 寺島 實郎 小島 順彦 宮原 賢次 吉田 靖男
岡 素之 佐々木 幹夫 勝俣 宣夫 〈3口〉 小林 栄三

●**賛助会員入会のご案内** ABICの活動の一層の拡大に向けて賛助会員へのご入会を是非共お願い申し上げます。

賛助会員

法人 (3社)

(社名五十音順)

(有) イーコマース研究所 (株) エックス・エヌ キーリサーチネット(株)

個人 (422名)

活動会員 2,147名

(2011年10月末現在)

会員入会のお問い合わせ・連絡先

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)

〒105-6106 東京都港区浜松町2-4-1 世界貿易センタービル6F (社) 日本貿易会内

TEL:03-3435-5973 FAX:03-3435-5979 E-mail:mail@abic.or.jp

関西デスクの移転

本年10月に関西デスク事務所が下記に移転いたしました。

〒541-0053 大阪市中央区本町4-4-24 住友生命本町第2ビル 9階

TEL・FAX：06-6226-7955

アクセス：大阪市営地下鉄御堂筋線・中央線本町（徒歩4分）